

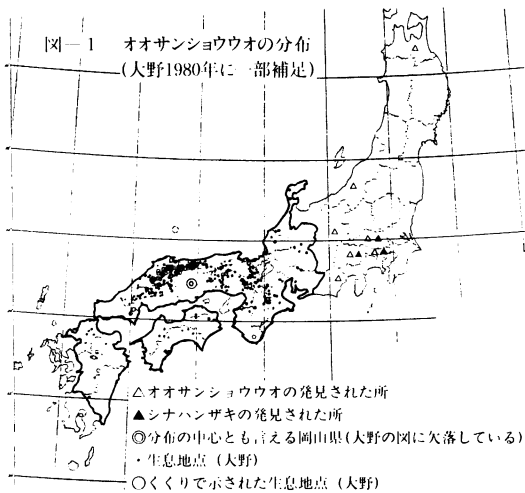
オオサンショウウオの研究 II

— 分布と調査地 —

栃 本 武 良*

オオサンショウウオの分布

オオサンショウウオは日本特産で、世界最大の両生類であると言われています。その分布もほとんどの図鑑類に岐阜県以西の本州と四国及び九州北部となっています。環境庁による第2回自然環境保全基礎調査(1978)の大野による分布図を一部修正して図-1に示しました。図鑑類の分布どおりの生息地が示されていますが、分布の中心とも言える岡山県が空白になっているのは理解に苦しむところです(多産地として◎を付す)。また自然の分布とは考えられませんが青森・長野・新潟・山梨・埼玉・東京などの河川で発見された例もあります(△を付す)。その上、最近では中国産のシナハンザキが捕獲されたというニュースも目にするようになりました(▲を



付す)。ほんとうにわずかな隙間があれば脱出しますので、ペットとして飼育されていたものが脱出し発見されたということだと思いますが、外国産の動物の野生化という問題で気がかりなことです。昭和47年には、岡山県で700匹(1.5トン)ものシナハンザキを食用として輸入した人がいました。新聞で報道され大騒ぎとなり、予約していた料理店などが批判を浴びて解約した例もありましたが、多くはペットとして日本各地へ売られたようです。現在ではワシントン条約(CITES Convention

on International Trade in Endangered Species of Wild Fauna and Flora)が昭和55年11月、7年かかってやっと日本の国内でも発効し、保護されることになりました。しかし、天然記念物とか絶滅しそうだとなると稀少価値に目を付けて金儲けを考える輩がでてくるのが最近の日本の悪い傾向です。

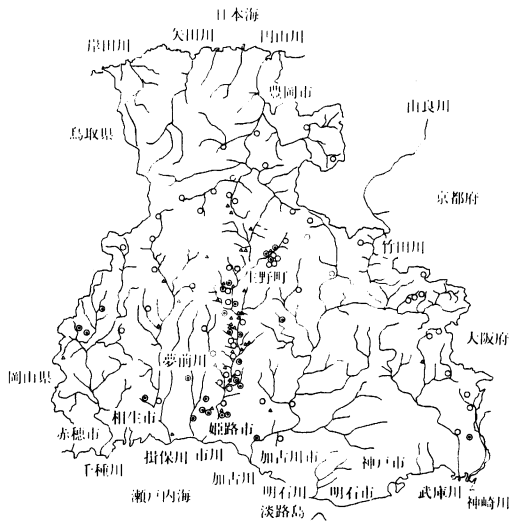
昭和61年6月に、大阪空港で台湾から20匹のシナハンザキの未成体(全長19~31cm)を密輸入しようとした19才の少年がいました。新聞報道によると少年は無職でマンションに住み、趣味で20匹のシナハンザキと35匹のワニを飼うために購入して来たと言っているそうです。ペット業者の影がちらつく事件でした。このシナハンザキは大阪税関より日本動物園水族館協会に要請があり、姫路市立水族館で緊急保護し、原産国へ戻すべく交渉中です。ただし、台湾は原産地ではなく、引き取りも拒否していますので、中国の科学院の研究者と連絡を取っています。

兵庫県下の分布

栃本(1978)の文献調査と水族館(神戸市・姫路市)などへの情報による分布図は、昭和53年までの記録であり、その後の10年分の情報を加えて図-2に示します。情報が当館中心になるので、西播磨地方の生息地点が多くなりました。多くの情報提供者の御協力によるものですが、他地方からの情報が少なく、本種の県下における自然分布を知る上で貴重な資料となりますので御協力下さい。

図-2より明らかなように、市川水系からの情報が圧倒的に多く、下流域の姫路市から最上流域になる生野町にかけて、その間にある多数の支流からも本種が発見されています。下流域における発見個体は70cmを越す大型の個体が多く、これらが自然状態で生息していたのかどうかという点については疑問が残ります。よく新聞記事になっていますが大きなオオサンショウウオを捕えたといって大騒ぎすることがあります。国の「特別天然記念物」に指定されているということは「手を触れてはいけない」ということなのです。研究のために一時的に網ですくい、全長や体重を測定して、その場ですぐに放すということだけでさえ、「文化財の現状変更許可」を文化庁から受けねばなりません。ですから一般の人は川で見

* 姫路市立水族館



図一 2 兵庫県におけるオオサンショウウオの分布
 △昭和53～62年の間に姫路水族館へもたらされた情報
 ◎同年間に緊急保護をした地点
 ○昭和53年までの調査による生息地点

つけても手を出さないことです。しかし、路上や下水、工事現場などで発見した場合は緊急保護をして水族館へ連絡して下さい。夏の谷川などで水遊び中に発見したオオサンショウウオを暑い市街地の自宅へ持ち帰り周囲の人に見せて自慢するなど愚の骨頂です。中には「天然記念物の珍しい動物」だから高く買ってくれと持ちこみ、逆に説教をされて不平をもらす人もいます。これらの人の手による移動や大水で流されて下流に来てしまった個体は、本来ならば流れを溯って上流へ戻るのですが、今では多くの堰やダムに阻まれて清流に帰りつくことができず繁殖にも参加できないで一生を終えるものと推定されます。水族館では、生息地での捕獲者には即刻、元の所へ放すように説得していますが、毎年のように何匹かの保護をしなくてはなりません。これらの個体は、機会ある度に上流域へ放していますが、調査時に再捕し、新しい環境にうまく入り込めたことを確かめられた時は一安心します。ただ、とにかく川の上流に放せばいいかと言うと、問題があります。市川水系の上流域の支流でも多産と言われる栃原川、非生息地の大見川と小田原川の例があるからです（内田他, 1978）。早く、本種の生息に適した環境条件を解明したいものです。

調査地

市川は姫路市に河口を開く流量約76kmの二級河川です。源流は中国山脈の東端を成す朝来郡生野町ですが、最上流部は黒川ダム（標高615m、堰高98m）となり、日本海へ流れる円山川の奥多々良木ダムとの間に揚水式の発電が行われています。その約10km下流には多目的ダムで

ある生野ダム（標高400m、堰高40m）によって銀山湖ができています。この二つのダムにより区切られた市川本流と、その間にある十余の支流には多くのオオサンショウウオが生息しています。しかし、少しの雨でも激流となり、逆に、しばらく雨が降らないと姿を消してしまう谷川もあり、環境の激変する水域です。黒川ダムは原則として降水量に応じた放水を行います。最低でも0.04 t/secの放水を維持します。この放水量が0.3t/secになると、それに比例した水量が十余の支流から加わり、調査のために滑り止めの付いた長靴をはいても川の中を歩けなくなります。こんな状態でもオオサンショウウオは流されることなく川底で活動しているのです。爪もないヌルヌルの四肢の指でよく体を支えているものだと感心します。黒川ダムは昭和48年の貯水開始以来、最大放水記録は15t/sec（昭和51年9月10日）とのことで、この大水量により、やっと発見した産卵巣のあった小流が枯れてしまいました（写真参照）。又、調査を始めて間もない頃、川の中州の1m位の高さの所にテントを張っていた時、1.4t/secの放水があり危うくテントごと流されるところでした。このように激しく変化する厳しい環境に耐えて、調査開始の昭和50年以來11年以上もの間、再捕を繰り返している個体もいます。

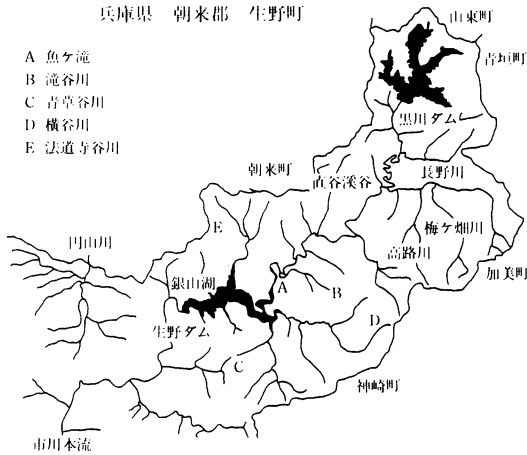
研究フィールドは、銀山湖に流入する三つの谷川（横谷・青草谷・法道寺谷）と本流の市川及び支流の滝谷です（図一3）。

本流との間にダム湖を挟んだ三つの谷川との間では今



干出した産卵巣のあった小流

図 3 オオサンショウウオの調査地
兵庫県 朝来郡 生野町



のところ往来がありませんが、支流の滝谷と本流との間では互いに本種の出入りが見られます。本流は魚影が濃く、特に夏には放流されたアユやニジマス、アマゴが多く、ウグイ・オイカワ・カワムツ・タカハヤなどの姿も目立ちます。

水温は昭和50年6月～52年12月の間で0.0～26.0℃、気温は-16.5～29.2℃でした。(日本動物園水族館協会、1978) その後の10年間では水温2.0～23.5℃、気温-7.5～27.9℃でした。これは調査時の測定記録ですから、この範囲外の温度は当然あったはずですが。この調査地で一番気にかかるのは、川が水そのものだけでなく水辺環境ともどもに年々悪化して来ていることです。最近の行政はどこでも同じことですが、何もなければ「観光」で、目玉商品がなければ「自然」を売りに出します。何もないのが自然であり、人が少なければ少ない程よい自然なのですから矛盾するわけです。特に夏休みの終わった九月の川辺は、観光客の残したゴミの山で悪臭を発することもあります。やがて秋の台風による大水はゴミをきれいに流し去ってくれます。しかし、このゴミはダムにたまり富栄養化を進める一助となり、この銀山湖にも水の華が見られるようになりました。このままでは、琵琶湖を上水源としている地方と同様に、臭い水を飲むことになるでしょう。これらの事実を私達はもっと真剣に考えてみる必要があると思います。

又、生き物たちに別の脅威があります。その一つは、「自然の荒廃」とは裏腹に「自然の美」を報道すべく入り込んでくるマスコミやカメラマンのことです。私達が自分の研究フィールドに彼等を伴って行く場合には、必ず同行を原則として、勝手な行動をさせないように監視を怠りません。なるべくならば彼等とは接触したく無いのですが、放っておくと何をするかわからぬ人が多いこともあり、また場合によってはオオサンショウウオの

保護の一助になればという考えもあり連れていくことがあります。最近では凶鑑写真などで売り出し中のカメラマンのトラブルがありました。Iは2～3回同行した後、再三の注意も無視して勝手に撮影活動をするようになりました。撮影も手を触れなければいいとしても、ヤラセの多いカメラマンのことですから人の見ていないところでは何をしているか想像するまでもありません。結局、夜間にオオサンショウウオを石で囲って撮影している所を見つけて一件着落となりました。彼等にとっては、一枚のフィルムにオオサンショウウオの姿を収めてしまえばそれまでであり、その後がどうなろうと一向に構わぬことなのです。棒でつつきまくり石で押さえつけても金にさえなればいいわけです。イリオモテヤマネコ、ヤンバルクイナ、ヤンバルテナゴコガネなど最近の珍しい生物の発見と報道合戦は目に余るものがあつたのは、まだ記憶に新しいことです。

もう一つの脅威は、河川の護岸工事です。岸辺を深く掘り、コンクリートの基礎の上にコンクリート・ブロックを隙間なく積み上げる工事では本種のすみかや産卵集のための穴が無くなってしまいます。川岸の道路側だけ工事されても、今までの半分の穴が無くなってしまいますこととなります。ある生物を亡ぼすもっとも簡単な方法は繁殖場を無くすことであるのはカブトガニの例を引くまでもないことです。何とか本種の生態を明らかにすることにより、彼等のためのメッカを確保してやりたいものです。

参考文献

1. 日本動物園水族館協会編 (1978) 稀少動物の保護増殖に関する調査研究報告書 338pp.
2. 栃本武良 (1978) 第2回自然環境保全基礎調査・動物分布調査報告書 (兵庫県の両生類・爬虫類) 99pp.
3. 大野正男 (1980) " (両生類・爬虫類、全国版その2) 55-70p.
4. 内田至・栃本武良・荻野洗太郎 (1978) 大河内地点自然環境実態調査報告書、魚類 187-208p.
5. 県営さいたま水族館編 (1987) SAITAMA 水族館だより No.4, 6p.
6. 兵庫県民サービスセンター編 (1979) 兵庫の川筋、275pp.